

# 威情劇場 97

「彼」の足は、電動車いすで走っている。手と胸はジュラルミン。四角い、液晶パネルの顔を持つ。

・アール知能映像通信研究所在。ここでも、感情へのアプローチが続く。昨年、コンピューター画面の中で“赤ん坊”(赤ちゃん)が泣いていた。

「塔」が塵を上げた。一  
トワーク・ニューヨベイビ  
ーだ。

つてみる。「ビーン」。金属音とともに上げた“顔”は、不安で青ざめていた。

「彼」は、快、不快を色で表現する。充電して満足していると、黄色。ガツンとぶつかると怒ると、赤。恐怖は、青。だんだん、ペットと過ぐしているよつな気になってしまる。

応して物語の展開が変わる映画。ハードルは高いが、いつか「感情劇場」を作りたい。

# まだ夢の夢?

『恋人の正体』  
翔太「口ボソツが笑うなんて、  
ありえないよな」  
美咲「そんなことないわ。きっと  
心を持つロボットは存在するわ」  
翔太「まさか。だって、人間の  
感情はそんな単純ぢやないよ」

今日の一席

美咲 「技術の進歩は大変なものよ」  
翔太 「あり得ないって。第一、笑う口ボットなんて気味が悪いだろ」  
美咲 「ワタシ笑うと、そんなに気持ち悪いからしら。ウフフフフ」

六四

ボット。それなりに



# 『電腦感情』に挑む

「正直など」と、まだ夢の  
夢ですね

読者の最近の「怒の」「立腹」のエピソードや、連載への意見をお寄せください。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し)FAX 460-11 (住所不要) 中日新聞社会部「感情劇場'97」取材班。フックスは052(20)43331、電子メールはwebmaster@chunichi.co.jp

映画「スター・ウォーズ」に登

「読者の立腹」を

人間はだれかと関係を持たない生きていけない。そのだれかが、コンピューターだとしたら、社会は病んでいく。松本は、そう危ぶむ。

連載「感情劇場」は第一部「笑い編」を終わります。名古屋社会部の志村清一、金田秀樹、小野木昌弘、島田佳幸、東京社会部の加古陽治が担当しました。近く、第二部（終り編）を重載ります。

二〇四

(文中敬称略)

通産省電子技術総合研究所の首席研究官、松本元（五〇）は、「コンピューターに感情を与えるつもりはない」と言つ。 「感情を入れると、人間がコンピューターの世界にはまることもある」といふ。

ワーメーバーは、菅野の横でまた眠っている。触角をほじくと、「ビーン」。むつくりと起き上がった。寝ぼけているのか、液晶パネルは白いまだ。「彼」が声をあげて笑つ曰

なんて、かつてはSFの世界。それが国家的な研究対象になつた。だが、「ミック」にしても、決まつたパターンの反応を繰り返すだけ。しゃべる」